鳥取の民話

31

収録・解説　酒井董美

岩美の通幻禅師誕生伝説も

子育て幽霊

（八頭郡智頭町波多）

語り手　大原寿美子さん（明治40年生まれ）
昭和62年8月23日収録

あらすじ

昔、あるところの娘さんが大きな腹になった。「困ったなあ、飯を食わなければ中の子が死ぬだろう」。両親は何日も娘にご飯を食べさせなかったら、とうとう娘は死んだ。しかたがないので野辺送りをした。

ある飴屋に夜、女が1文銭を持って飴を買いに来る。一定の6文がすんだら金がないので、桐の葉を持って出る。「木の葉がついて出とるわ」いうようなことで、それが毎日なので番頭さんが後をつけたら、一人娘の死んだ新墓の前へ行くとおらんようになる。その家の人が掘り返いてみたら、その娘さんは真っ黒になって死んどるけど、やや子はまるまる太っていた。

その幽霊が子どもを育て、子どもが生きとったということです。そればっちり。

イラスト・福本隆男

解説

この話は関敬吾氏の昔話分類では、本格昔話の「4・誕生」に「子育て幽霊」として次のように登録されている。

1、妊婦が死んだので葬る。

2、（a）幽霊になって毎晩同じ時刻に一文銭を持って飴を買いに来る。または（b）地中で子どもが生まれた夢を見せる。

3、墓を掘ると屍が生きている男児を抱いている。買った飴がかたわらにある。

4、子どもを救い出して育てる（後に名僧になる）。

昔話として語られている智頭町の語りでは生まれた子どもは性別が不明であるが、男児として生まれ名僧になったとする話は多い。

松江市では中原町の大雄寺に関する伝説として小泉八雲が紹介していて有名であるが、全国的にも類話は語られている。鳥取県でみれば岩美郡岩美町の曹洞宗、通幻派の祖として名声の高かった通幻禅師（通幻寂霊）誕生にまつわる伝説が残されているが、水飴を買う部分は脱落している。『岩美町誌』（923～924ページ、昭和43年岩美町刊）に詳しい。概略しておこう。

通幻禅師は元享2（1322）年、浦富に生まれた。俗名・永沢家光。父は同郡細川村の太郎麿、母は浦富岩淵長者永沢某女で、二人は恋仲となり妊娠したが、難産で死亡。香林寺門前自得庵のそばに葬った。

翌日、諸国遍歴の一人の僧がここを通り、新しい塔婆の立てられた新墓を見て経をあげ回向していたところ、かすかに幼児の泣き声がする。付近の民家に立ち寄って墓のいわれを尋ねると、前記の事情でこれはたぶん墓中で分娩したということになり、墓を掘り起こしてみると、母の亡きがらから男児が生まれていた。僧は「仏の縁によることだから、ぜひ私の弟子にもらいうけたい」と頼み、豊後国に連れて行く。その子は後に名僧になったという。

（元鳥取短期大学教授）

（水曜日に掲載）

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。